昨日の悔恨今朝の懺悔

初もののスイカの一片をガブリしたとたん、私は心の中で叫んだ。「しまった！これお父さんへのお供えだったのに！」と。しかし、だれにも知られないまま、改めて他の一片を仏前に捧げた。「お父さん、ごめんなさい」このスイカは、父の慰め役をされていた山中博文さん（偕生園園長）が、とくに、父へと名ざしのお供えだったのだ。たまたま息子が来たので、まず半分をその家に分け、つぎに私たちの食する番、完全に父は念頭になかった。

父よりも先に逝った母の声が聞こえそうだ。「生き仏さまのほうが先だよね」――昨日の悔恨。

放浪のひと山頭火の歌。「うどんささげて母よいただきまする」。今日は珍しくうどんを恵まれた。数十年前に自殺した薄幸の母に、それを捧げて語るがごとく木陰で祈っている。この緒方村（現緒方町）も幾度か彼の乞食の旅路だった。

父関係のものを棄てかねて、まだ幾つも残っている。今日は、空の香典袋の束の芳

名を懐かしみつつ整理していたら、あっ一万円札一枚が残っているっ。「もうけたっ！」と叫ぶ自分。私は始めから改めて調べていった。浅ましい自分がそこに重く残っているだけだった。―今朝の懺悔。

時には良寛和尚は私にとってやさしい師である。良寛の「金を拾うことほど楽しいことはない」という話を聞き、自分でためしてみた。自分で捨て自分で拾ってみても、少しも楽しくない。くり返しているうちに、そのお金が本当に見つからなくなってしまう。しんけん探しまわったあげく、やっと見つけて、その話は本当だ、としみじみ納得した。良寛さんさえそうだったんだもの。

（一九九〇年六月十二日）